▲輪島の白米千枚田。田の数は1,004に及ぶ。最小のものは2㎡程度

支部見聞録（北陸支部）

From 能登

世界に価値を認められた「能登の里山里海」

衰退しつつある伝統的な農業とそれに関わる文化的要素を次世代へと継承していきたい――。そんな目的のために「国際連合食糧農業機関（FAO）」が2002（平成14）年に開始した、世界農業遺産というプロジェクトがある。2011（平成23）年、日本で初めて世界農業遺産に佐渡と並んで認定されたのが、「能登の里山里海」だ。竿にはためく旗のように日本海に突き出した能登。この半島には、人と自然が織りなす価値あるものが今も確かに息づいている。

▲山あいに広がる、能登町五十里の農村風景 ★

能登ならではのトータルな価値と魅力

能登の道々を車で行くと、その広さに驚かされる。石川県に属する七尾市、輪島市、珠洲市、羽咋市、志賀町、宝達志水町、中能登町、穴水町、能登町、4市5町の広さは約1,980平方キロメートル。能登といえば海のイメージが強いが、海岸線を離れれば、山また山、森また森が続く。山は低山主体だが奥深く、山間にはため池や田んぼがたたずみ、白壁や板壁に黒い瓦屋根の民家が点在する懐かしい里山の風景が広がる。

里山とは昔ながらの農山村の暮らしを支えてきた自然のことで、人が利用することで豊かな自然環境が形成・維持されてきた。石川県環境部里山創成室主幹の村角美登さんによれば、「石川県は県土の6割が里山ですが、能登に関していえばほぼ全域が里山といっていいでしょう」とのこと。同様に人の営みと関わり合ってきた里海も、至るところに存在している。とはいえ里山や里海は日本中にある。なぜその中から特に能登の里山里海が世界農業遺産に価する、価値あるものと評価されたのだろうか？世界農業遺産とは、FAOが、次世代に継承すべき重要な農林水産業や生物多様性、農業景観を有する地域をシステムとして認定する制度だ。能登以外ではインド・カシミールのサフラン農業や中国・万年の伝統稲作など、エリアも対象も限定されている。しかし能登の場合は少々異色で、農林水産業や生息する生物の多様性だけでなく、農耕や漁業にまつわる祭礼や儀礼、輪島塗に代表される伝統技術など、里山里海に展開してきた文化まで広く総合的に認定されている。農業遺産への認定は能登の奥深く幅広い魅力と価値の証しともいえるのだ。

▲ボランティアによる千枚田の収穫

▲能登町「春蘭の里」での農作業体験 ★

▲七尾市庵町の棚田、はざ干し、定置網 ★

取材協力／石川県環境部里山創成室　写真提供／世界農業遺産活用実行委員会（★印の写真）・石川県観光連盟

先人の知恵や技術、日本の原風景が息づく地

能登は、日本海に突き出して三方を海に囲まれ、西側には遠浅の砂浜や岩礁地帯、東には内湾性の海域と、海岸線も変化に富んでいる。内陸は低山と丘陵から成り、沖合を対馬暖流が流れているために比較的温暖で豊かな生物相が見られ、古くから里山里海として利用されてきた背景をもつ。また、半島という地理的条件と、中央や都市からの距離的な隔たりもあり、特色ある農山村の文化や景観が今によく伝えられている。

傾斜地での「棚田」による稲作や天日で稲を干す「はざ干し」、海では「海女漁」など昔ながらの農漁法が行われている。能登全域には2,000を超える灌漑用のため池があり、山間の盆地には水田が広がって屋敷林を背に民家が点在して、春から夏には水田で白鷺が餌をついばむ日本の原風景ともいえる景色が見られる。外浦の海沿いの集落には夏の西日や冬場の強風を遮るため、細い竹を隙間なく並べた「間垣」が巡らされ、日本では能登だけに唯一残る「揚げ浜式」の製塩が今も行われている。山間地では里山の資源を使った炭焼きも健在だ。また、能登ならではの祭礼や年中行事にも事欠かないが、特に収穫を祈り、感謝するために長方形の巨大な行灯（あんどん）（キリコ）を担ぎ出す祭りや、行事では「あえのこと」が名高い。あえのこととは、12月や2月初旬に奥能登の農家で行われる、収穫を感謝して次期の豊作を祈る行事。農家の主人が、田んぼから田の神様を自宅にお連れして風呂や食事を供し、「神様、お湯加減はいかがでしょう」などと、あたかも目前に神様がいるかのようにもてなす民俗学的にも貴重なもので、ユネスコの無形文化遺産にもなっている。

能登の里山里海では、ただ単に伝統的なものが残っているというだけでなく、未来へと引き継ぐための積極的な取り組みがなされていることも、認定への大きな力となった。

「棚田オーナー制度を作ったり、減農薬の棚田米を売り出したり、また耕作放棄地で蕎麦を作ってブランド化を図る、農家民宿を中心としたグリーンツーリズムに住民たち自身が取り組むなど、多彩な取り組みも評価されました」と村角さん。

◀輪島の海女漁
夏期には沖合の舳倉島などで漁が行われる

▲輪島朝市で、軒先に下がる干物

▲活きのいい魚介が朝市の魅力だ

▲穴水のボラ漁で使われる櫓

▲各地で行われるキリコ祭り

能登の活性化を図って里山里海の未来への継承を

能登に限った話ではないが、高度成長期から少子高齢化への時代の流れのなかで過疎化が進み、里山は荒廃の危機を強めてきた。石川県では、この危機に対処するべく、かねてより全県的に里山の保全に力を尽くしている。2011（平成23）年4月には里山創成室を設け、同時に里山里海に立脚した民間の事業に資金的な支援を行うために53億円のファンドも作った。とりわけ能登に関しては、里山保全と地域振興をリンクさせた取り組みに力を入れている。世界農業遺産の認定もその一環として位置づけ、認定を活かすために県と地元4市5町、農林漁業、商工・観光団体で「世界農業遺産活用実行委員会」も立ち上げて、能登の里山里海を未来へ引き継ぐ取り組みを推進中だ。例えば高校生が能登の伝統技術や知恵を聞き書きするといった、まず住民自身が能登への理解と自負を深める事業を進める一方で、企業とのタイアップによる能登のスタディーツアーや、北陸新幹線の開通をにらんで首都圏への能登の物産と魅力発信といった施策に力を入れている。残念ながら世界農業遺産そのものの認知度があまり高くないのがネックだったが、2013（平成25）年に静岡、熊本、大分からも新たに3地域が認定されたことを受け、佐渡も含め5地域でタッグを組んで世界農業遺産のPRも図る。

「北陸新幹線開通も1年後に迫り、地元では能登を盛り上げていこうという機運も高まっています。多くの人に世界農業遺産の意義を知っていただき、遺産に認定された能登の里山里海の魅力をぜひ体感してもらいたいですね」と村角さん。

新幹線が開通すれば東京～金沢間は約2時間半。金沢と能登は、無料の自動車専用道路「のと里山海道」でつながれている。能登には空港もあり、1日往復2便の東京羽田間の飛行はわずか1時間だ。距離の隔たりを縮めて、能登の魅力はよりいっそう輝きを増すことだろう。

北陸新幹線、今年度中に金沢まで開通！

北陸新幹線は、上信越や北陸を経由して東京と大阪を結ぶ構想の整備新幹線だ。これまで長野駅止まりで便宜的に長野新幹線と呼ばれてきたが、いよいよ2015（平成27）年春には、長野から新潟県・富山県を通り、石川県の金沢まで開通する。さらに福井方面にも延伸し、2025（平成37）年を目標に小松、加賀温泉、芦原温泉、福井と南越（仮称）、敦賀の6駅が開業予定だ。

▲新幹線の開業を待つ金沢駅

別冊 FROMはウェブサイトへ
eふぁみり もあわせてご覧ください!
http://jp.fujitsu.com/family/honbu/family/
eふぁみり
海の幸や山の幸から輪島塗の器まで。地場こだわった多彩な能登丼を味わってみませんか?